

学修経過・成果可視化システムを活用した教員養成 —セルフデザイン型学修の展開と初年次教育—

Pre-service Teacher Education with Data Visualization System of Learning Process and Achievement -Self Design Learning and First Year Experience-

藤原 伸彦^{*1}, 石川 勝彦^{*2}, 泰山 裕^{*2}

Nobuhiko FUJIHARA ^{*1}, Katsuhiko ISHIKAWA ^{*2}, Yu TAIZAN ^{*2}

^{*1} 鳴門教育大学教員養成特別コース／セルフデザイン型学修支援センター

^{*1} Special Teacher Training Course, Naruto University of Education / Center for Supporting Self-Design Learning

^{*2} 鳴門教育大学学習指導力・ICT 教育実践力開発コース／セルフデザイン型学修支援センター

^{*2} Development on Practice of Learning Guidance and Application of ICT Course, Naruto University of Education / Center for Supporting Self-Design Learning
Email: fujihara@naruto-u.ac.jp

あらまし：鳴門教育大学において 2023 年度より展開している「セルフデザイン型学修」について報告する。そのための仕組みである、学生の学びの指針となる「鳴門パースペクティブ」、学びについて蓄積し支援する「学修経過・成果可視化システム」、セルフデザイン型の学修スタイルを学ぶ初年次教育、教員による省察支援について説明する。

キーワード：創造的実践者としての教師の養成、セルフデザイン型学修、学習経過・成果可視化システム、初年次教育、省察支援

1. 探究的な学びを自らデザインし学び続ける 教員の養成

子供たちの教育ニーズの多様化や、非常に早いペースでの情報化の発展、グローバル化の進展に伴い、探究的な学びを自らデザインして学び続けていくことができる教員の養成が求められている。例えば中央教育審議会⁽¹⁾は、「教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる。」としている。

鳴門教育大学では、教師として主体的に学ぶ力を有し、子供の多様性や教育課題の複雑さに対応した教育実践を創り出していく教師（創造的実践者としての教師）の養成を目指して、2023 年度よりセルフデザイン型学修を展開し始めた。本稿では、セルフデザイン型学修について、特に学生の学びを蓄積し可視化するために開発した「学修経過・成果可視化システム」とその利用の実際について報告する。

2. セルフデザイン型学修の展開

ここでは、セルフデザイン型学修を「自分の学びについて、自分はどうなりたいのか、そのために何を、どんなふうに学んでいくかを計画し、実行し、自分の学びの状態や成果に基づいて何が学べたか、何が十分で何が十分でないかを考えたり、計画が妥当であったかを検討したり、自分の学び方についても振り返ったりしながら、次の自己課題を決め、再び計画して…を繰り返す、自分を成長させていこう

とするスタイルの学修」と考えている。その実現のために、(1) 学びの指針となる鳴門パースペクティブの設定、(2) 学修経過・成果可視化システムの開発と運用、(3) セルフデザイン型の学修スタイルを学ぶ初年次教育の実施、(4) 教員による省察支援、を行なった。

2.1 鳴門パースペクティブ

これまで鳴門教育大学では、学生が自身の学びを省察するための指針として「授業実践力評価スタンダード」を開発し運用してきた⁽²⁾。教員養成においてスタンダードを設定し活用する動きは当時多くの大学であり、鳴門スタンダードを活用した教員養成も同様の取り組みとして位置付けられる。実際に運用する中で、ややもするとスタンダードが学修の目標となり、学生がそれに準拠するように学ぼうとするような姿が見られた。それは、今求められている教員像とは異なる。それに対して鳴門パースペクティブは、学生が自身を見つめるためのガイドとして示されており、それにより目標型ではなく自己伸長型の学びを促進するものとして設定されている。大きくは 2 つ、「鳴門教育大学で育成する学校現場で活用できる教師としてのコンピテンシー」4 領域（教師としての構え／教師として必要な基本的知識／教師として必要な基本技能／教師として必要な実践的指導力）とそれらの下位項目（計 12 観点）と「鳴門教育大学で育成する広く社会で活用できる汎用的なスキル」4 領域（人間性／連携・協働力／課題発見・価値創造力／省察力と職能成長を志向する態度）とそれらの下位項目（計 14 観点）からなる。

2.2 学修経過・成果可視化システム

学生が自身の学びを蓄積し、振り返ることを支援するために、「学修経過・成果可視化システム」を開発した。学生は、大学の講義や実習、日々の生活の中で体験したことを、自身の教師としての学びに関わるエピソードとして週1つ以上システムに入力する。加えて、そのエピソードについての分析・考察および次にやってみたいアクションプランを記入、そのエピソードが鳴門パースペクティブのうちどれに関連しているかをタグ付け（複数選択可）する。さらにそのエピソードに関するキーワードをハッシュタグ（オリジナルタグと呼ぶ）として入力する。

学生たちが入力した情報は、ダッシュボードで確認することができる（図1）。左列に学生個人の、右列に学生全体のデータが表示される。画面トップに学生が鳴門パースペクティブのうちどのタグが何回使われているかを示すレーダーチャートが示され、続けて使用された鳴門パースペクティブのランキングとそれぞれのタグが付されたエピソードのうちAIにより抽出された代表的な文が示されている。さらにオリジナルタグについても同様のランキングと、最新のオリジナルタグが示されている。ランキングに示されたタグをクリックすることで、そのタグを付したエピソードを閲覧することができる。レーダーチャートおよびランキングは半期ごとに区切られて表示される。

これらを見ることで、学生は自身の学びを他の学生の学びと比較しながら考察することができる。これにより、自身の興味のありかや強みを知ることができる。また、半期ごとの変化をみることで、自身の学びの変容や成長を知ることができる。本システムを活用することで、学生がどのような教師になりたいかを、そのためにどのようなアクションを起こしておけば良いかを考える契機になると期待される。

2.3 初年次教育

学生のセルフデザイン型学修を促進するため、2023年度より「鳴門大生学びの第一歩：学びのセルフデザイン」という初年次教育を開講した。この講義では、セルフデザイン型学修とは何かについてや学修経過・成果可視化システムの利用方法について説明の後、ワークショップ等を主としたPBL形式で授業を進めている。例えば、4人程度のグループに分かれて小・中・高と受けてきた授業で優れていたもの、問題があると思われるものについて考えを出した後、「小学校算数の授業のシナリオを書き、模擬授業をしよう」という活動を行い、優れた授業を作り実践するには何を学べば良いかを考えるような授業を実施した。

この授業では、自分がどのような教員になりたいか、自分はどのようなことができ、何を学べば良いのかを考え、自身の考えを記録に残し、省察しながら学びをデザインし実践していくという学修スタ

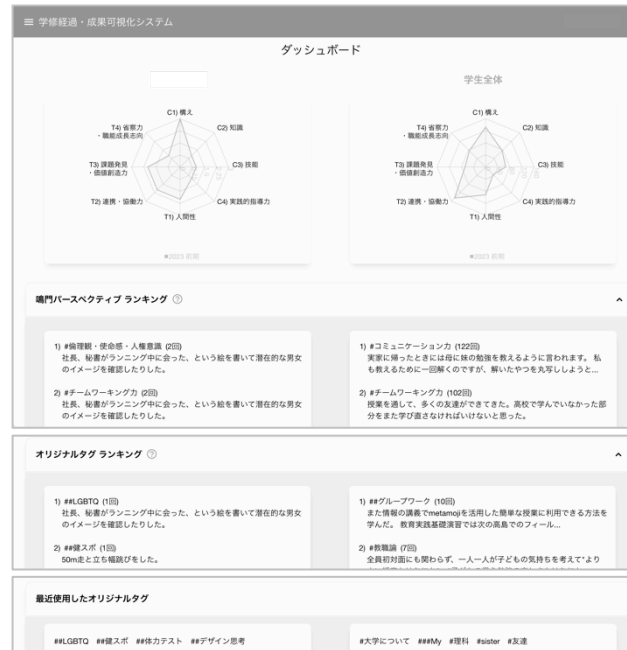


図1 学修経過・成果可視化システム、
ダッシュボード画面

イルをとすることを体験的に学ばせることを意図している。

2.4 教員による省察支援

半期に一度、学生が記録したエピソード等を閲覧し、鳴門パースペクティブの各項目について自分がどのようなことを学び考えてきたかをまとめる時間を設定している。学生は、まとめた内容をもって自身の所属するコースの担当教員と面談し、自身の学びと学び方について助言を受け、次の半期の自己目標を設定する。その際、教員は、単純に指導するだけでなく、学生のセルフデザイン型学修スタイルを強化する形で支援を行う。

これを4年間繰り返すことを通して、学生が「新たな教師の学びの姿」を体現できるようになると期待される。

3. 展望

本稿を作成している段階では、運用を開始して2ヶ月分の書き込みがなされた状態である。大会での報告時には、学修経過・成果可視化システムの実際について、前期分の書き込みやそれらを使った振り返りの事例について、具体的に報告したい。

参考文献

- (1) 中央教育審議会: 『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)』, https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf (参照 2023.5.31)
- (2) 鳴門教育大学特色 GP プロジェクト編著: 『教育実践の省察力を持つ教員の養成』, 協同出版株式会社, 東京 (2010)